

語り部が担う防災・減災

東日本大震災
11年6ヵ月

全国被災地シンポから

東日本大震災から11年半の節目に、「全国被災地語り部シンポジウム in 東北」が9月3日から3日間、宮城県南三陸町の南三陸ホテル観洋などで開かれた。7回目となる今回のテーマは、「時代を超えて災害を伝える語り部」。自然災害が頻発する中、生命を守る防災・減災の先頭に立ち、被災地の体験や教訓を未来に語り継ぐ語り部の重要性が浮き彫りとなったシンポの様相を紹介する。

宮城・南三陸町



震災遺構の存在意義などで活発な議論が交わされた
パネルディスカッション＝4日 宮城・南三陸町

また、体験と教訓をどう次世代に継承していくかという課題について、一つの視座を提起したのがリアス・アーク美術館の山内宏泰館長だ。

山内氏は、私たちが小説や映画、絵画といった表現物から平和の尊さなどの感覚を養ってきたように、「人間は必ずしも同じ経験がなくても、『相似の経験』、いわゆる似た経験を持っていれば共有は可能だ。震災10年以上が経ち、芸術的手法を活用して、普遍的な内容を長く伝える必要性が高まってきているのではない

生命守る行動の啓発を誓う

今回は、コロナ禍で規模を縮小し、感染対策を徹底する中、「3・11」や阪神・淡路大震災を経験した語り部ら150人が集い合った。メインとなった4日には、原口強・東北大学特任教授が基調講話。国内外の地震被災地で津波堆積物の調査を行ってきた原口氏は、自然災害の姿は過去も同様であり「被害を防ぐ唯一の方法は人間が過去の記録を忘れないようにすることだ。まさに語り部の皆さんが大事だ」と強調した。

また、地震や津波は自然現象であり、日本列島が地殻変動の活動期にあるため「災害の原因となる自然現象を正しく理解し、想定される事象に対し優先順位を付けて準備すること」と述べた。参加者は話に聞き入り、「歴史の証言者」として語り部自身も自然現象を理解し、事実を伝える役割の大きさを再認識した。

シンポジウムを通じて共有されたことの一つが「震災遺構の存在の重要性」。それは3・11から11年、「阪神」から27年という時間の経過が、いや応なしに語り部にもたらした実感とも言うべきものであった。

「物言わぬモノが伝える雲雨気がある。その場所があり、そこで語るからこそ次世代にも伝わるのではないかと、27年にして実感した」と吐露した。

南三陸町で語り部ガイドを務める「復興みなさん会」の後藤一磨代表は、震災がれきや建築物が片付けられ、広がっていた被災の風景が消えたことで、この地で起きた大惨事すら消えてしまふとの危機感を持った。と回想。この見解に次いで、原口特任教授は「広島の原爆ドームに行けば、そこで

いろいろな想像して考える。本物が語るすこみがある。壊れたものが伝える圧倒的なスケールにはひれ伏すわけだ、片付けてはいけないうものが絶対ある」と力説した。

パネル討論に続いて行われた三つの分科会のうち、「震災遺構の10年後」「記憶の風化防止だけでなく、遺構保存の重要性」のテーマで開かれた分科会では、私費を投じて民間の震災遺構として保存し続ける意義や課題などを議論。公営、民営双方の遺構において価値ある活用のある方などについて活発な意見が交わされた。

芸術通しても共有が可能な「相似の経験」

か」と指摘。正しい事実を伝えれば、次世代もまた、正確に伝えることができるはずだとし、人の想像力を信じて伝承のあり方を次世代と共に模索する必要性を



「高台に一度避難したら戻ってはいけぬ」と語り部バスツアーで教訓を語り継ぐ伊藤渉外部長（向かって左）

「高台に一度避難したら戻ってはいけぬ」と語り部バスツアーで教訓を語り継ぐ伊藤渉外部長（向かって左）

訴えた。

シンポではこのほか、宮城県石巻市や南三陸町、気仙沼市の被災地を巡る語り部バスツアーも運行した。

このうち、南三陸町を巡るツアーでは、津波で4階屋上まで浸水しながらも、327人の命が助かった民間震災遺構「高野会館」などを見学。ホテル観洋の伊藤文夫渉外部長による、

まさに「想像力」をかき立てる庄巻の語り部に、参加者一同は標を正し真剣なまなざしを向けていた。

7回を数えるシンポジウムを通じ、地域間に広がってきた緩やかな語り部ネットワークは、そのまま、防災意識の向上を後押しする存在になり得る。今回のシンポの最後に参加者全員で採択した「最新の自然災害の被害想定を基に防災・減災・被災の意識を高め、有事に備える行動を啓発する」との「語り部宣言」に、その使命感が如実に表れている。